



青森県基本計画

「青森新時代」への架け橋

子どもと子育て及び結婚に関する分析

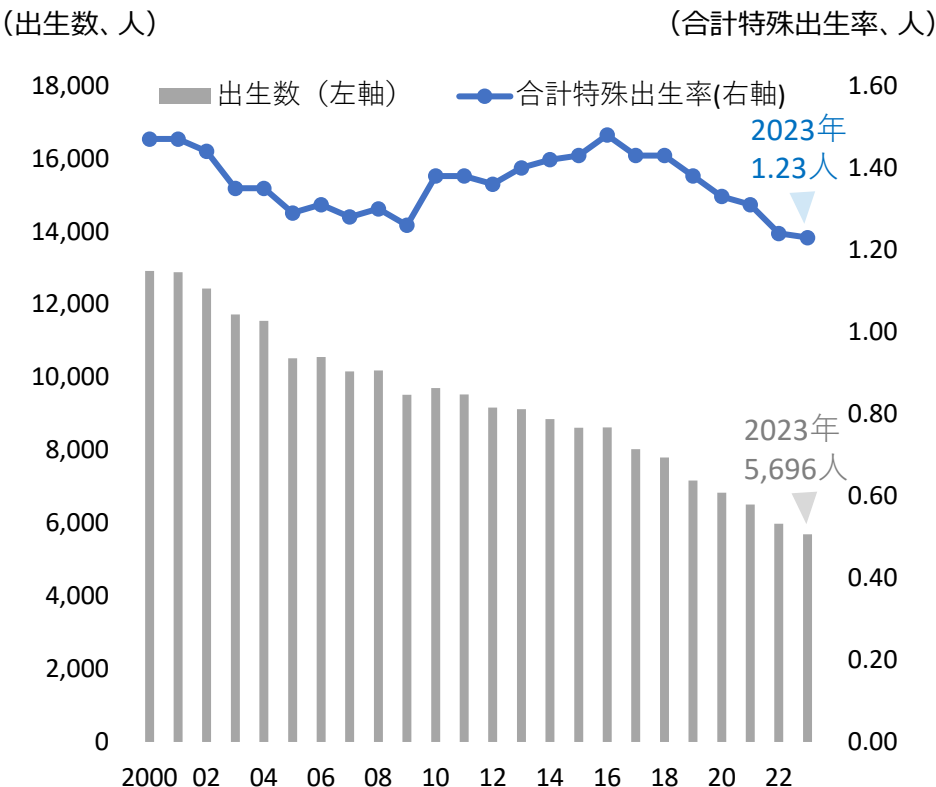
令和6年6月17日（月）

青森県総合政策部

今回の報告について

- 今年度からスタートした「青森県基本計画『青森新時代』への架け橋」のアクションプランである「あおり創生総合戦略」では、本県が人口減少に対応していくため、社会減、自然減対策により、人口減少のスピードをできるだけ緩和していくことに加え、人口減少や人口構造の変化を踏まえた持続可能な地域づくりを進めていくこととしている。
- 6月5日に国が公表した「令和5（2023）年人口動態統計月報年計（概数）」において、令和5年の本県の出生数は5,696人、1人の女性が一生に産む子どもの数を表す合計特殊出生率は1.23となり、自然減が続いている（図①）。
- 今回の報告は、本県における少子化の要因を考察するために県が昨年度実施した「子どもと子育て及び結婚に関する調査」を基に分析を行ったものである（表②）。

図① 本県の出生数と合計特殊出生率の推移



表② 「子どもと子育て及び結婚に関する調査」の概要

項目	内容
調査実施地域	青森県全域
調査対象	0～18歳の子どもの親 20～39歳の独身者
標本数	0～18歳の子どもの親 2,000人 20～39歳の独身者 3,000人
抽出方法	層化二段無作為抽出法
調査方法	インターネットによるウェブ回答
回収結果	0～18歳の子どもの親 737(回収率36.9%) 20～39歳の独身者 579(回収率19.3%)
調査期間	令和5年9月11日～9月25日

分析内容

- 少子化の進行を踏まえて、自然減対策のエビデンスを検討するに当たり、以下の2つの問を立て分析した。
- 1つ目の問は、「本県の子育て世帯等は何人の子どもを希望しているのか」というものである。
- 2つ目の問は、少子化の背景の一つである婚姻率の低下について、本県は全国46位（2.8（人口千対））であることから、「本県の20～30代の独身者は結婚を希望していないか」というものである。

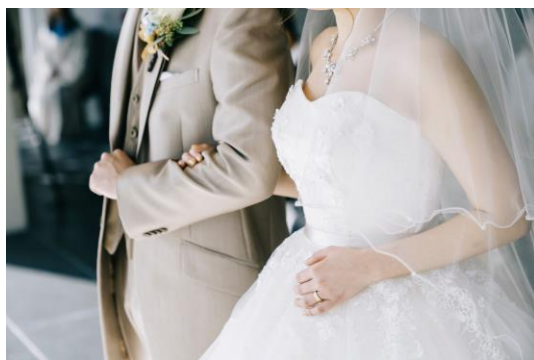
問① 本県の子育て世帯等は何人の子どもを希望しているのか



【分析に当たっての考察テーマ】

- Q1 理想の子ども数は何人か
- Q2 実際の子どもの数と理想の子どもの数に差が生じる要因について
- Q3 夫婦の家事・子育て分担割合について

問② 本県の20～30代の独身者は結婚を希望していないか



【分析に当たっての考察テーマ】

- Q1 20～30代の独身者は結婚を希望していないか
- Q2 結婚希望に年齢や年収は関係あるか
- Q3 なぜ、20～30代の独身者は結婚していないか
- Q4 20～30代の独身者に結婚マッチングシステムの取組は有効か

（備考）この分析でいう子育て世帯とは「子どもと子育て及び結婚に関する調査」に回答した本県の0～18歳の子どもの親を指す。
また、20～30代の独身者とは「子どもと子育て及び結婚に関する調査」に回答した本県の20～39歳の独身者を指す。

問①

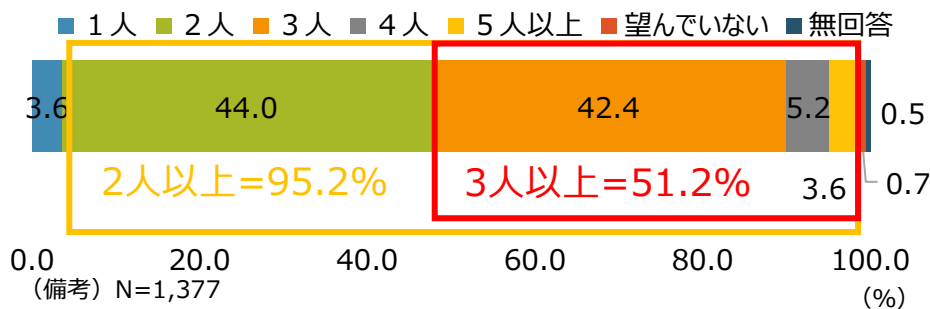
本県の子育て世帯等は何人の子どもを希望しているのか

問① 本県の子育て世帯等は何人の子どもを希望しているのか

Q1 理想の子ども数は何人が

- 子育て世帯の51.2%が理想の子ども数を3人以上と答えており、理想の子ども数を2人と答える割合を含めると95.2%となっている（図③）。また、20～30代の独身者の60.1%が欲しい子どもの数を2人以上と答えている（図④）。
- 子育て世帯の理想の子ども数と20～30代の独身者の欲しい子どもの数を基に算出した「希望出生率」は2.07となった（図⑤）。
- 子育て世帯の実際の子ども数と理想の子ども数を見ると、実際の子ども数が1人の世帯は66.4%が理想の子ども数を2人と答え、2人の世帯は42.8%が理想の子ども数を3人と答えるなど、実際のこどもの数と理想のこどもの数に差がある（図⑥）。

図③ 子育て世帯の理想の子ども数



図⑤ 理想・欲しい子どもの数を基に算出した「希望出生率」

図③、図④の結果を踏まえて算出した希望出生率

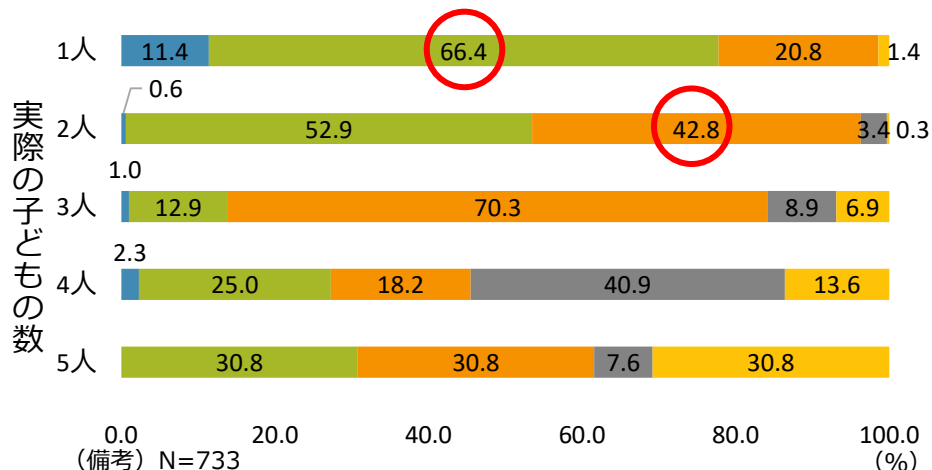
= (子育て世帯の割合×理想の子ども数 + 20～30代の独身者の割合×20～30代の独身者の欲しい子ども数) × 離死別等の影響 ÷ 総サンプル数 は、

「希望出生率」= **2.07**

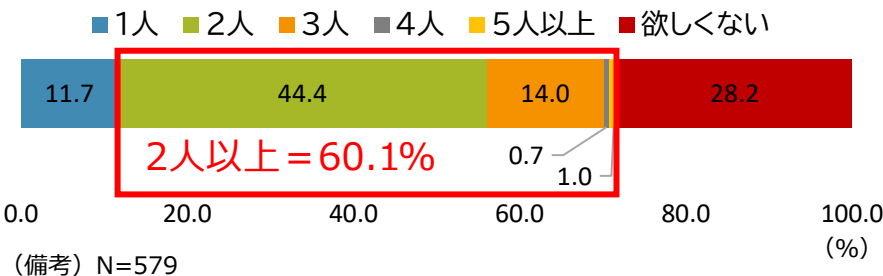
(備考) ただし、子どものいない夫婦のサンプルが本調査には含まれていないことに留意すること。
また、「離死別等の影響」は国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口」(令和5年推計)における出生中位の仮定値0.966を用いている。
また、合計特殊出生率(その年に生まれた子どもの数÷15-49歳の女性人口)とは異なる。

図⑥ 実際の子ども数×理想の子ども数

理想の子ども数 ■ 1人 ■ 2人 ■ 3人 ■ 4人 ■ 5人



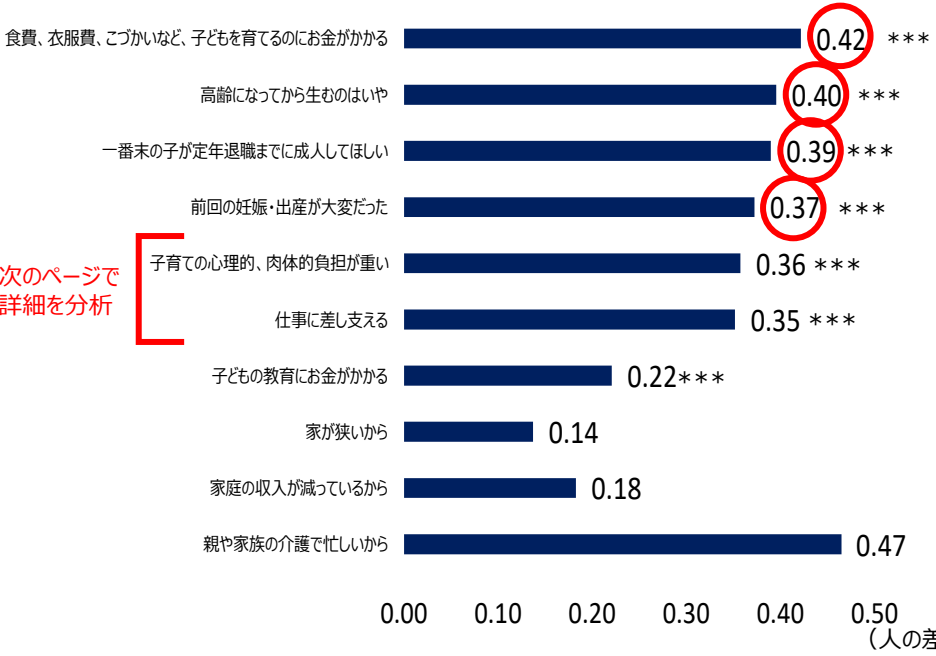
図④ 20～30代の独身者の欲しい子どもの数



Q2 実際の子どもの数と理想の子どもの数に差が生じる要因はなにか

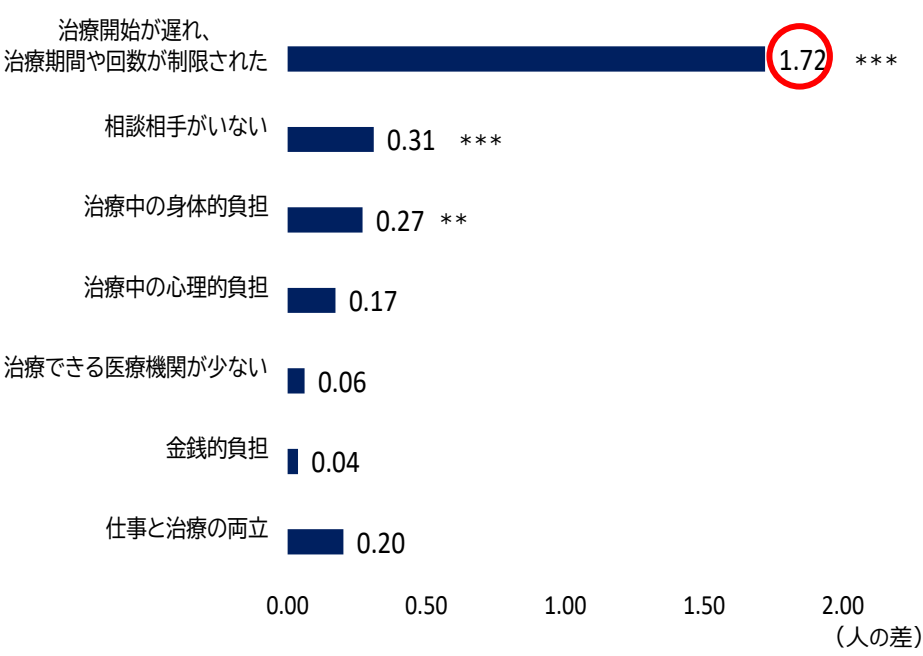
- 実際の子どもの数と理想の子どもの数に差があることから、その差が生じる要因について回帰分析を行った。その結果、「食費、衣服費、こづかいなど、子どもを育てるのにお金がかかる」(0.42人差)、「高齢になってから生むのはいや」(0.40人差)、「一番末の子が定年退職までに成人してほしい」(0.39人差)、「前回の妊娠・出産が大変だった」(0.37人差)などの要因に統計的に有意な差がみられた(図⑦)。
- また、不妊治療を経験した人で、実際のこどもの数と理想の子どもの数の差と「不妊治療で困ったこと」の関連性について分析したところ、「治療開始が遅れ、治療期間や回数が制限された」という回答に1.72人の統計的に有意な差がみられた(図⑧)。

図⑦ 実際の子どもの数と理想の子どもの数に差が生じる要因



次のページで
詳細を分析

図⑧ 理想の子どもの数と不妊治療



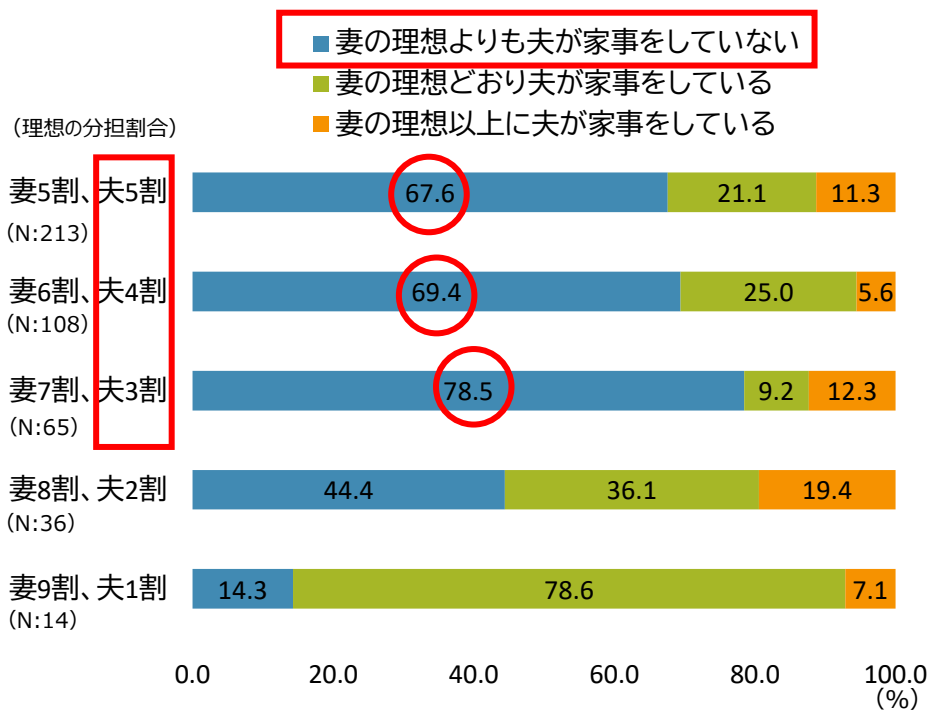
(備考)図⑦は、実際の子どもの数と理想の子どもの数の差を目的変数として、理想より少ない理由を説明変数(ダミー変数)とした上で、性別・年齢をコントロールし、回帰分析を行った。
図⑧も図⑦と同じ目的変数に対して、「不妊治療で困ったこと」を説明変数(ダミー変数)とした上で、性別・年齢をコントロールし、回帰分析を行った。
また、不妊治療経験者のサンプルが少ないことから(98サンプル)、信頼性のある統計的推定を行うため、誤差の影響を最小限に抑える頑健な標準誤差を用いて分析を行っている。
アスタリスクは、*** 1%水準、** 5%水準で統計的に有意(目的変数と説明変数の間に統計的な関係)があることを指し、アスタリスクがない箇所は統計的な関連性がみられなかった。

問① 本県の子育て世帯等は何人の子どもを希望しているのか

Q3 夫婦の家事・子育て分担割合について

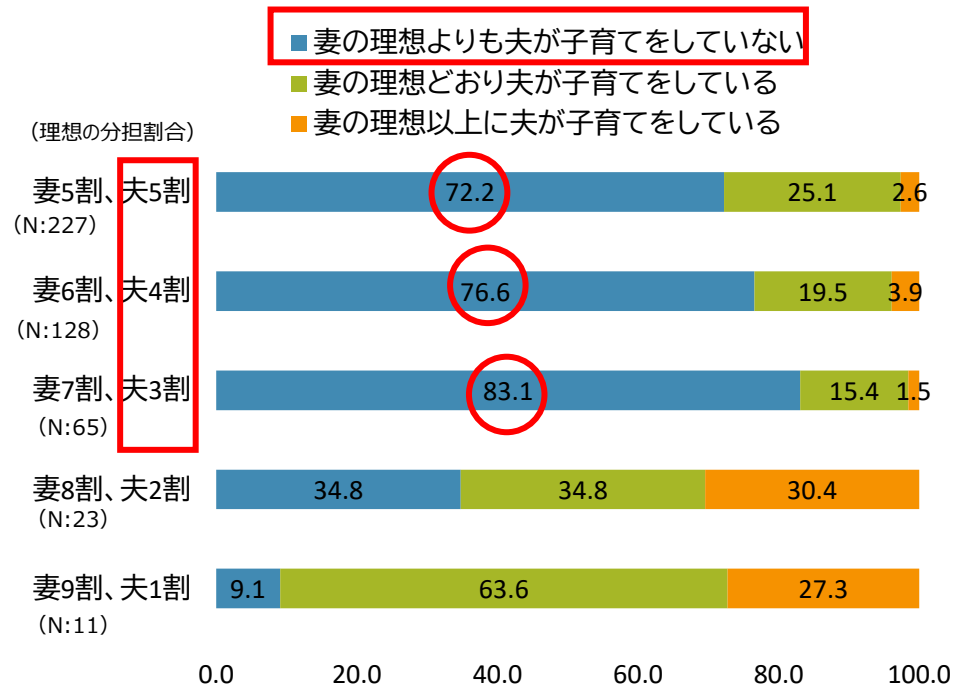
- P5の図⑦において、「実際の子どもの数と理想の子どもの数に差が生じる要因」として「子育ての心理的、肉体的負担が重い」（0.36人差）や「仕事に差し支える」（0.35人差）という結果が出ていることから、家事・子育て分担割合について分析した。
- 家事・子育てについて、夫に5割～3割分担して欲しいと考えている妻は、「妻の理想よりも夫が家事・子育てをしていない」と感じている割合が大きい（図⑨、⑩）。

図⑨妻の理想の分担割合に対して夫が家事をしているか



(備考) その他のサンプル数は「妻10割=6」、「妻4割、夫6割=8」、「妻3割、夫7割=9」、「妻2割、夫8割=0」、「妻1割、夫9割=1」、「夫10割=3」と、0又は1桁であることからグラフから外している。

図⑩妻の理想の分担割合に対して夫が子育てをしているか



(備考) その他のサンプル数は「妻10割=5」、「妻4割、夫6割=8」、「妻3割、夫7割=1」、「妻2割、夫8割=1」、「妻1割、夫9割=0」、「夫10割=0」と、0又は1桁であることからグラフから外している。

問① 本県の子育て世帯等は何人の子どもを希望しているのか

＜分析結果のまとめ＞

- 1 本調査を基に算出した子育て世帯等の「希望出生率」は2.07。
- 2 実際の子どもの数と理想の子どもの数に差が生じる要因は、経済的な要因だけでなく、年齢、心理的・肉体的負担、仕事のキャリアといった複数の要因が影響している。特に、不妊治療の期間や回数制限は顕著に影響している。
- 3 家事・子育てについて、妻が夫に5割～3割分担して欲しいと考えている妻は、「妻の理想よりも夫が家事・子育てをしていない」と感じている割合が大きい。

問②

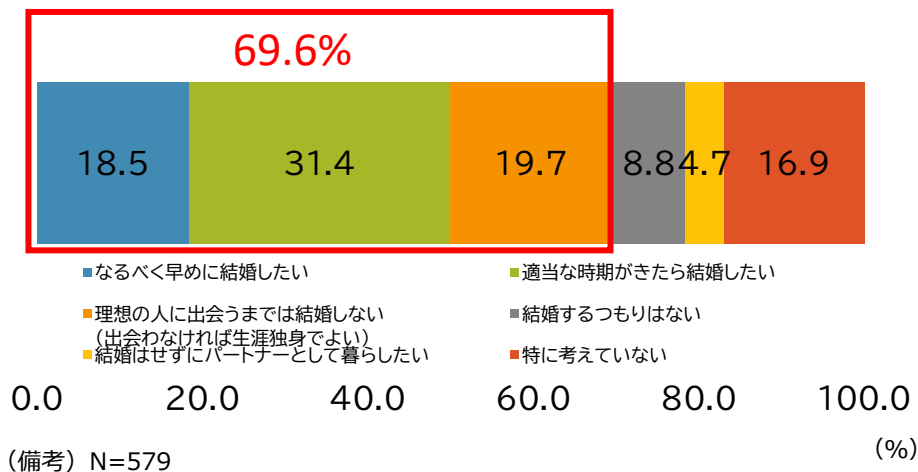
青森県の20～30代の独身者は結婚を希望していないか

問② 青森県の20～30代の独身者は結婚を希望していないか

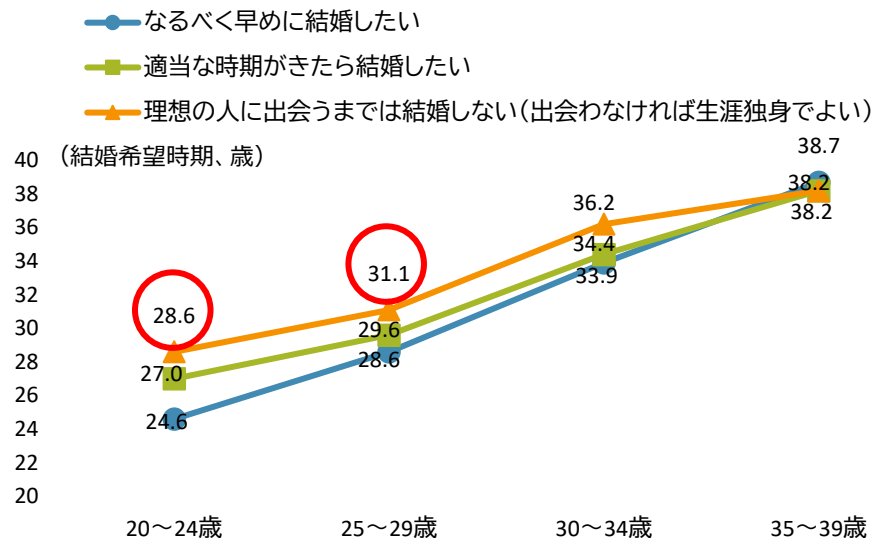
Q1 20～30代の独身者は結婚を希望していないか

- 20～30代の独身者の69.6%は結婚を希望している（図⑪）。
- 結婚希望時期についてみると、20代の場合、「理想の人に出会うまでは結婚しない」と考えている人でも、30歳前後までには結婚したいと考えている（図⑫）。

図⑪ 結婚に対する希望について



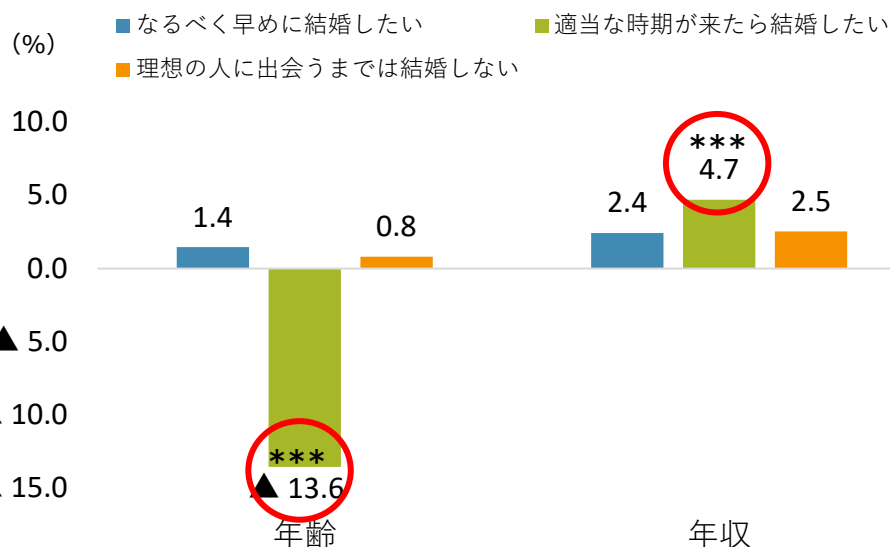
図⑫ 結婚希望時期について



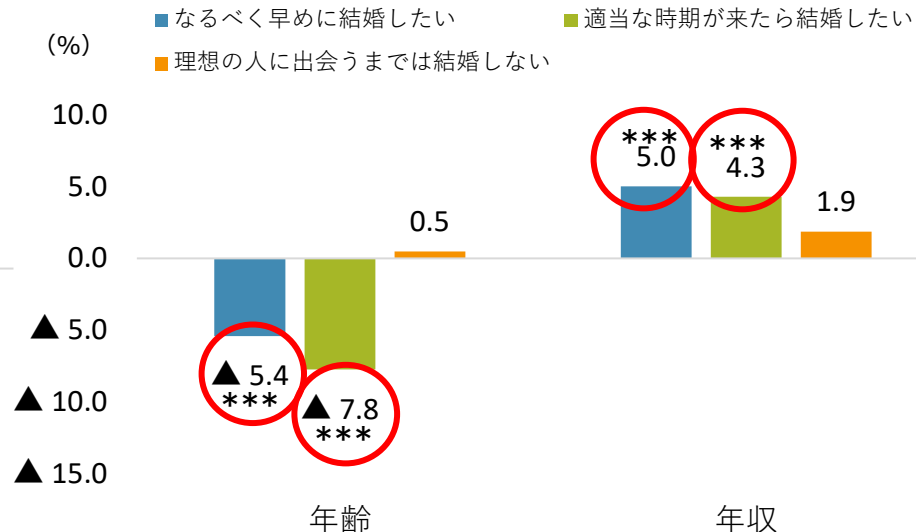
Q2 結婚に対する希望に年齢や年収は関係あるか

- ・ 男性の20～30代の独身者は、年齢が上がると「適当な時期が来たら結婚したい」と答える割合は約13.6%低下する（図⑬）。
- ・ また、年収が増えると「適当な時期が来たら結婚したい」と答える割合は4.7%上昇する（図⑬）。
- ・ 一方、女性の20～30代の独身者は、年齢が上がると「なるべく早めに結婚したい」と答える割合は5.4%低下し、「適当な時期が来たら結婚したい」と答える割合は7.8%低下する（図⑭）。
- ・ また、年収が増えると「なるべく早めに結婚したい」と答える割合は5.0%上昇し、「適当な時期が来たら結婚したい」と答える割合は4.3%上昇する（図⑭）。

図⑬ 結婚に対する希望と年齢・年収の関係（男性）



図⑭ 結婚に対する希望と年齢・年収の関係（女性）



(備考)結婚に対する希望を目的変数として、男女別に年齢と年収を説明変数として、多項ロジット分析（3つ以上の選択肢に直面した人が、各選択肢を選ぶ確率を計算する分析手法）を行った。グラフの数字は限界効果を指し、結婚を「特に考えていない」人と比較して、それぞれの説明変数が1単位増えるとどう結婚希望がプラス・マイナスにそれぞれ変化する割合を示している。アスタリスクは、*** 1%水準で統計的有意（目的変数と説明変数の間に統計的な関係）があることを指し、アスタリスクがない箇所は統計的な関連性がみられなかった。

問② 青森県の20～30代の独身者は結婚を希望していないか

Q3 なぜ、20～30代の独身者は結婚していないか

- 結婚に対する希望と結婚相手に求める条件では、結婚に対する希望がある人は、「人柄」「価値観が近いこと」「経済力」の順で共通している（図⑮）。
- 結婚に対する希望と結婚していない背景では、結婚に対する希望がある人は、「適当な相手がいない」「経済的に余裕がない」「異性との出会いの場がない」という割合が大きい（図⑯）。

図⑮結婚に対する希望×結婚相手に求める条件

結婚に対する希望	1位	2位	3位
なるべく早めに結婚したい	人柄	価値観が近いこと	経済力
適当な時期がきたら結婚したい	人柄	価値観が近いこと	経済力
理想の人に出会うまでは結婚しない （出会わなければ生涯独身でよい）	人柄	価値観が近いこと	経済力
特に考えていない	価値観が近いこと	人柄	経済力
結婚するつもりはない	人柄	経済力	価値観が近いこと
結婚はせずにパートナーとして暮らしたい	人柄	価値観が近いこと	経済力

（備考）N=579

図⑯結婚に対する希望×結婚していない背景

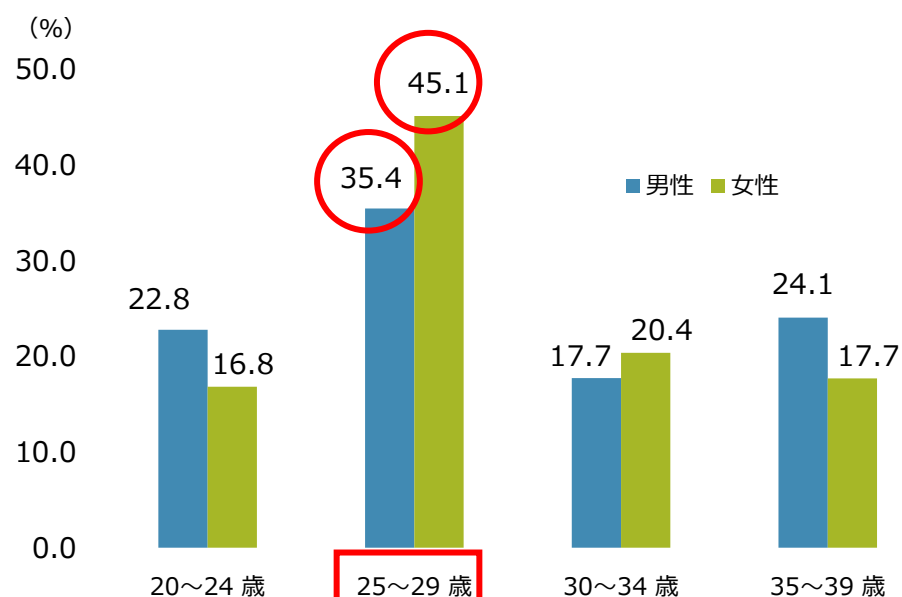
結婚に対する希望	1位	2位	3位
なるべく早めに結婚したい	適当な相手がいない	自由や気楽さを失いたくない	異性との出会いの場がない
適当な時期がきたら結婚したい	適当な相手がいない	経済的に余裕がない	異性との出会いの場がない
理想の人に出会うまでは結婚しない （出会わなければ生涯独身でよい）	経済的に余裕がない	適当な相手がいない	異性との出会いの場がない
特に考えていない	結婚するつもりがない	自由や気楽さを失いたくない	経済的に余裕がない
結婚するつもりはない	自由や気楽さを失いたくない	経済的に余裕がない	結婚するつもりがない
結婚はせずにパートナーとして暮らしたい	自由や気楽さを失いたくない	経済的に余裕がない	適当な相手がいない

（備考）N=579 11

Q4 20～30代の独身者に結婚マッチングシステムの取組は有効か①

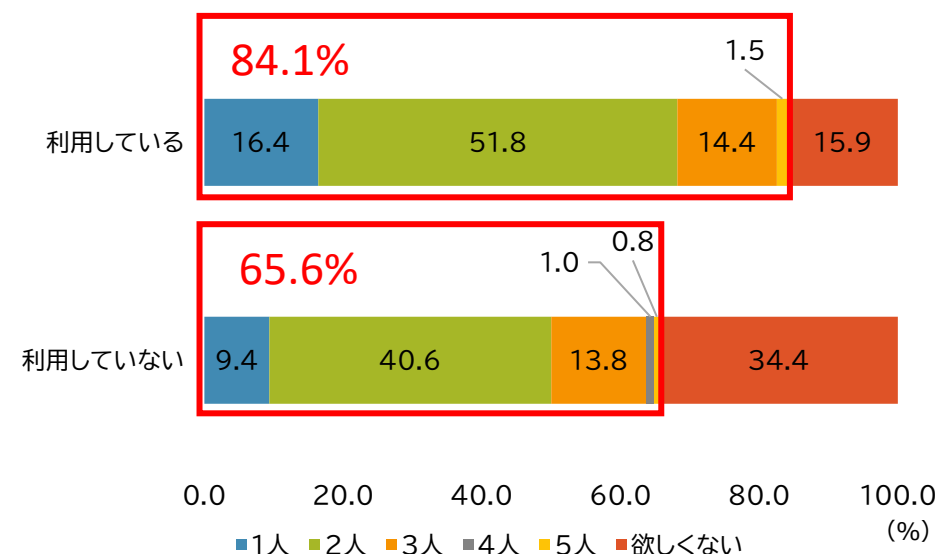
- 「適当な相手がいない」「異性との出会いの場がない」という課題に対する施策として、結婚マッチングシステムの取組が各自治体で広がっている。結婚マッチングシステムは、交際や結婚を希望する男女の出会いを支援するためのものであり、民間企業が運営するものから青森県が運営する「AI（あい）であう」など様々なサービスが存在している。ここでは官民を含めた結婚マッチングシステムの利用者について分析する。
- 結婚マッチングシステムの利用者の属性は、男女・年齢別でみると、男女ともに、25～29歳の利用割合が最も大きくなっている（図①⑦）。
- 結婚マッチングシステムの利用者の84.1%が子どもを欲しいと答え、利用していない者の65.6%と比べて割合が大きくなっている（図①⑧）。

図①⑦結婚マッチングシステムの利用者の属性（男女・年齢）



（備考）男性=79、女性=113

図①⑧結婚マッチングシステムの利用の有無と欲しい子どもの数

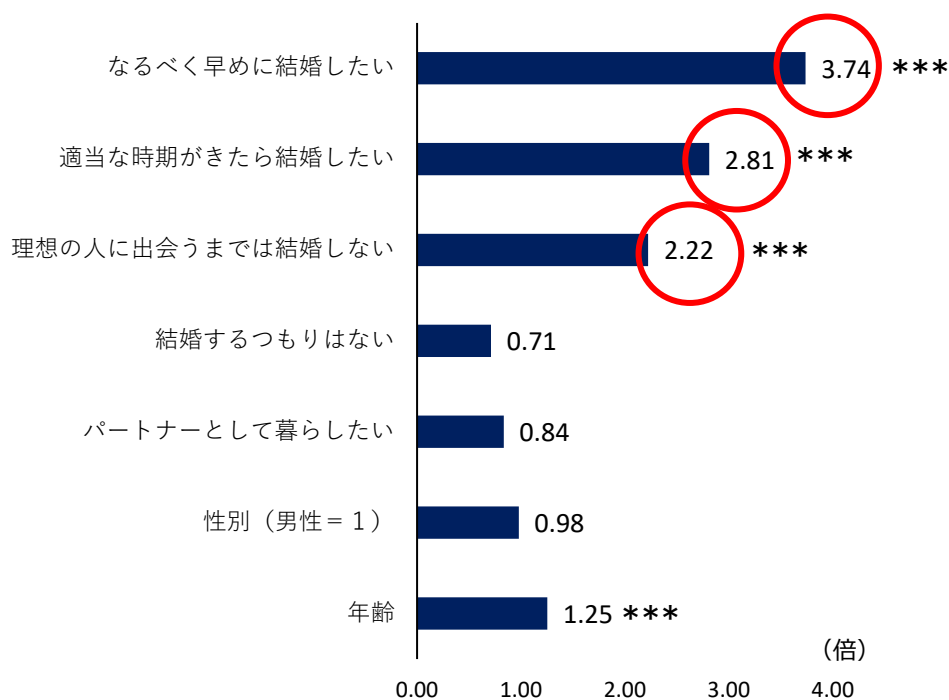


（備考）利用している=195、利用していない=384

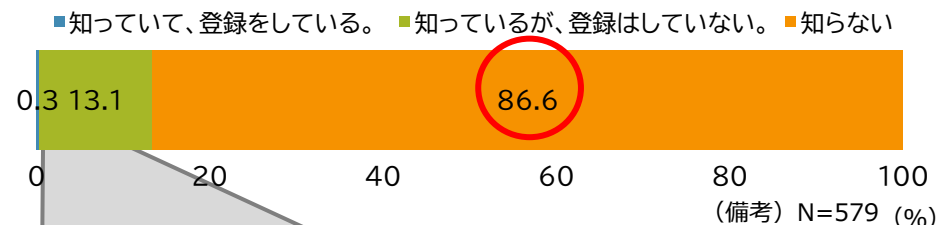
Q4 20～30代の独身者に結婚マッチングシステムの利用は有効か②

- 結婚に対する希望を持っている人は持っていない人と比較して、結婚マッチングシステムを利用している確率が2.22倍～3.74倍高くなっている（図⑱）。
- ただし、県が運営している結婚マッチングシステム「AIであう」は86.6%が「知らない」と答えている（図⑳）。
- また、「AIであう」を「知っているが、登録はしていない」と答えた人（13.1%）のうち、「マッチングシステムを利用することに不安や抵抗感がある」と答えた人が30.2%いる（図㉑）。

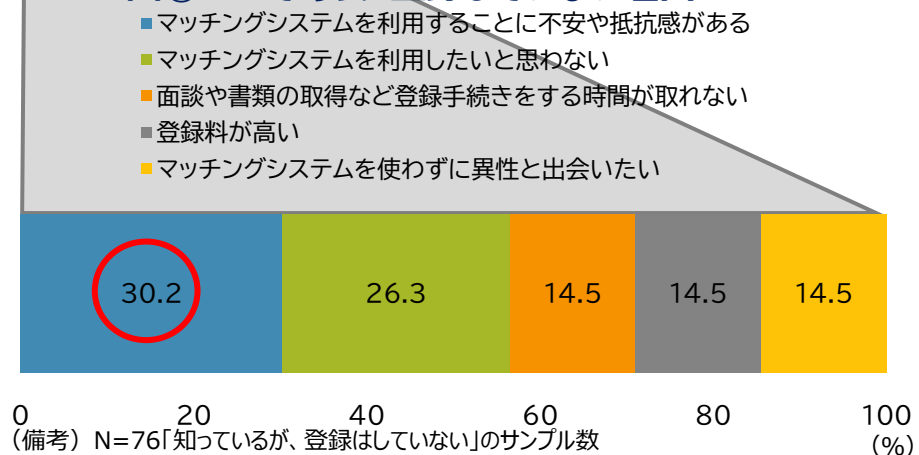
図⑱結婚に対する希望と結婚マッチングシステムの利用の有無



図㉑「AIであう」の認知について



図㉒「AIであう」に登録していない理由



（備考）図⑱は、結婚に対する希望がアプリの利用に与える影響を見たもの。結婚について「特に考えていない」と人と比較して、アプリを利用する倍率（オッズ比）を表している。分析方法は、結婚マッチングシステムへの利用の有無（利用している=1、利用していない=0）を目的変数として、結婚に対する希望をダミー変数（希望=1、そうでない=0）にとり、ロジスティック回帰分析（いくつかの要因から「2値の結果（はいorいいえ）」が起こる確率を説明する分析手法）を行ったもの。アスタリスクは、*** 1%水準で統計的有意（目的変数と説明変数の間に統計的な関係）があることを指し、ない箇所は統計的な関連性がみられなかった。

問② 青森県の20～30代の独身者は結婚を希望していないか

＜分析結果のまとめ＞

- 1 本調査を基にすると、20～30代の独身者の約7割は結婚を希望しており、20代は30歳前後には結婚したいと考えている。
- 2 年収の増加は結婚に対する希望にプラスに影響し、年齢の上昇はマイナスに影響している。
- 3 一方、結婚していない背景には、「適当な相手がいない」、「異性との出会いの場がない」、「経済的に余裕がない」ことがあげられている。
- 4 結婚マッチングシステムは20代後半が多く利用している。また、結婚マッチングシステム利用者は、利用していない者と比べて、子どもを欲しいと答える割合が大きくなっている。

問①・問②を踏まえた分析結果の考察

．．．．．

- ◆ 本調査を基に算出した子育て世帯等の「希望出生率」は2.07であったことから、希望を叶えられる環境を整備して、後押ししていくことが重要と考えられる。
- ◆ 実際の子どもの数と理想の子どもの数に差が生じる要因は複数あり、それぞれが複合的に影響していると考えられることから、子育て世帯への実質所得増を含めた経済的支援、妊娠・出産の負担軽減や早い時期から安心して不妊治療を開始できるようなサポート体制の充実、妻への家事・子育て分担割合の偏重の解消などといった各要因にアプローチしていく取組が必要と考えられる。
- ◆ 20～30代の独身者の約7割は結婚を希望しており、特に、20代は30歳前後には結婚したいと考えていることや結婚には年齢の上昇がマイナスに、年収の増加がプラスに働いていることから、結婚希望者が結婚して子どもをもうけ、育てられるようなビジョンを描けるよう、20～30代の所得の向上・経済的な安定が重要と考えられる。
- ◆ 結婚マッチングシステムは20代後半が多く利用しており、また、子どもを欲しいと答えていることから、「適当な相手」「理想の人」と出会う確率を高める結婚マッチングシステムの取組は、婚姻率の上昇に有効な施策と考えられ、結婚に対する希望を持つ人たちの登録促進と登録に向けた不安等の解消の取組が必要と考えられる。

子育て世帯への包括的な支援に加えて、20代が30歳前後での結婚の希望を叶えられるよう、所得の向上、経済的な安定、結婚マッチングシステムの周知・充実に重点的に取り組む必要がある。